

アンドレ・ジルによるロッシェニの caricature

(『ラ・リュヌ』パリ、1867年7月6日号)

(水谷彰良コレクションより)

『ラ・リュヌ』と1867年7月6日号のロッシェニの caricature

第二帝政期のパリでは、数多くの絵入り新聞が創刊された。『ラ・リュヌ (La Lune)』は反ナポレオン3世の姿勢を示した風刺新聞で1865年に創刊され、1868年1月まで続いた。表紙に有名人の caricature を多色刷り木版画で掲載し、人気を博したが、風刺が強すぎて発禁になるケースもあったという。サイズは49.2×34cm。毎号4頁からなり、表紙以外の3頁に戯文を読み物として多数掲載している。

1867年7月6日号(第3年、第70号)の表紙を飾るロッシェニの caricature は、写真家でもある風刺画家アンドレ・ジル(André Gill [本名 Louis-Alexandre Gosset de Guines], 1840-85)が描き、大砲に点火するロッシェニと喜捨を求める痩せた犬に焦点を当てている。これはパリ万国博覧会の求めでロッシェニが作曲し、5日前の7月1日に博覧会産業館で初演されたばかりの《ナポレオン3世とその勇敢なる民衆への“賛歌”》を題材にした風刺絵で、この賛歌では合唱隊の「皇帝万歳!」の叫びを合図に鐘が打ち鳴らされ、大砲が炸裂する。けれどもロッシェニがナポレオン3世に媚びを売ったと批判するのではなく、この曲が皇帝をコケにする意図を持つことを前提に、大砲に「DIVIN MAESTRO (神々しい巨匠)」「CYGNE DE PESARO (ペーザロの白鳥)」「PESARO DU CYGNE (白鳥のペーザロ)」「EXCUSEZ DU PEU (ささやかなれどお許しあれ)」と書かれ、曲芸師のような衣裳のロッシェニが大道芸で施しを求めているようにも見える。下部にはロッシェニが『ラ・リュヌ』主幹フランソワ・ポーロ(François Polo, ?-1874)に宛てた、自分の caricature を掲載することを喜んで許可する旨を記した文章がそのまま複製されている(日付は1867年6月27日)。



『ラ・リュヌ』1867年7月6日号(第3年、第70号)のロッシェニの caricature (筆者所蔵)